

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 11 月 22 日 11:34AM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 34,000～42,000 円

[NY ダウ]

【当面の想定レンジ】 38,500～44,600 ドル

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 18,000～19,500

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 137.000～157.600 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 99.578～107.927

エリオット波動とは

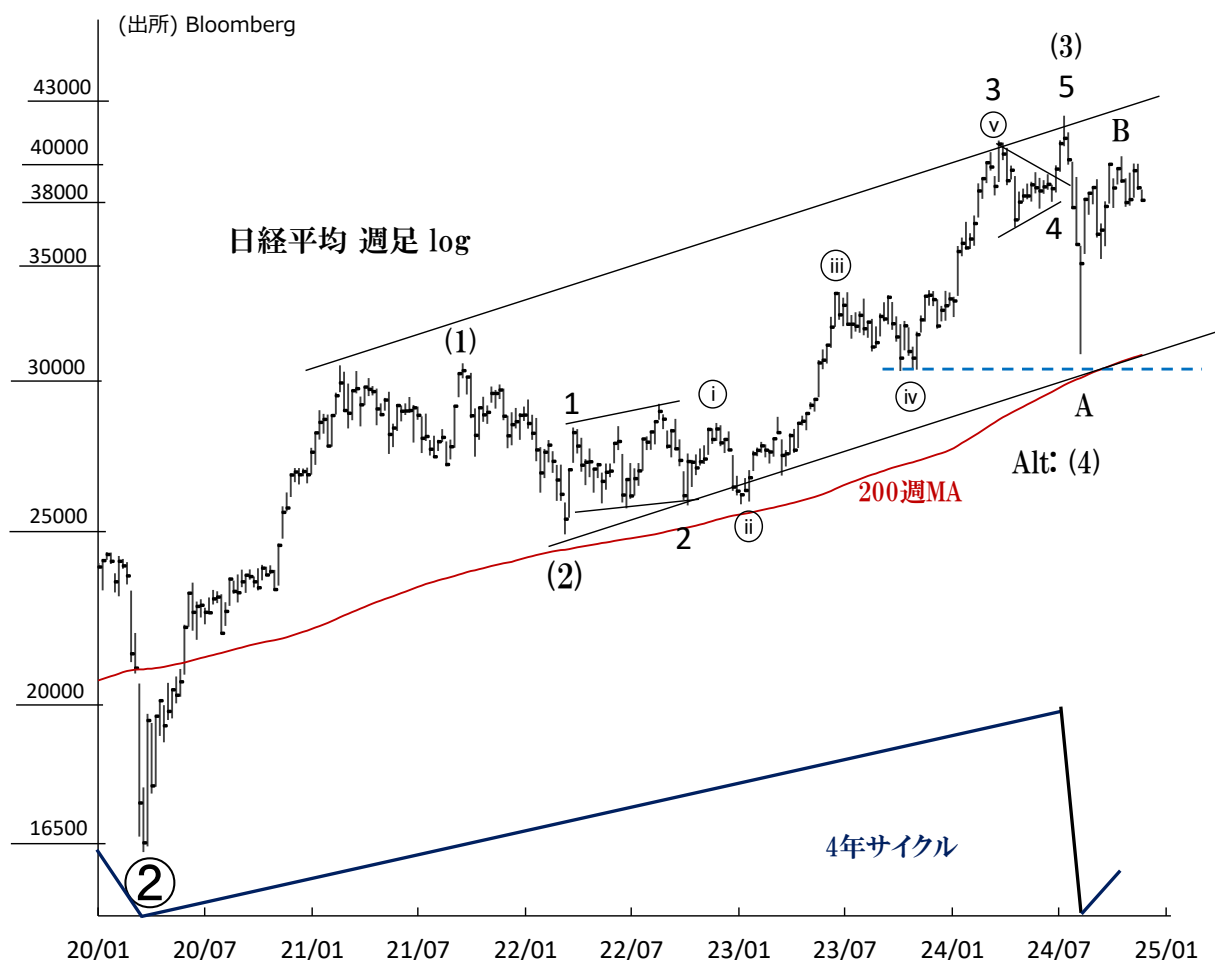
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均



【週足 エリオット波動分析】

42,426 円(7/11 高値)以来の第(4)波(インターミディエイト級)中 A 波は、31,156 円(8/5 安値)を以て終わったとみられます。それは 20 年 3 月以来の 4 年サイクル底に相当します。あるいは、8 月から第(5)波の上昇に既に入ったかもしれません。いずれにせよ日経平均は、来年 42,426 円を上抜き最高値を更新する可能性が高い、とみています。

日経新聞によれば、6 割の企業で、4-9 月期最終損益が市場予想を下回りました。自動車や商社が不振となり、日経平均予想 EPS は 10 月 15 日の 2514 円で頭打ちとなっています(11 月 21 日は 2448 円)。通期での業績持ち直しは期待されていますが、この先も製造業を中心に一段と業績見通しに陰りが生じるようだと、第(5)波の上値メド 4 万 5000 円は未達となりそうです。さらに第(5)波の天井は、最短で 2025 年 2 月頃(節分天井)に付けてしまうでしょう(※)。

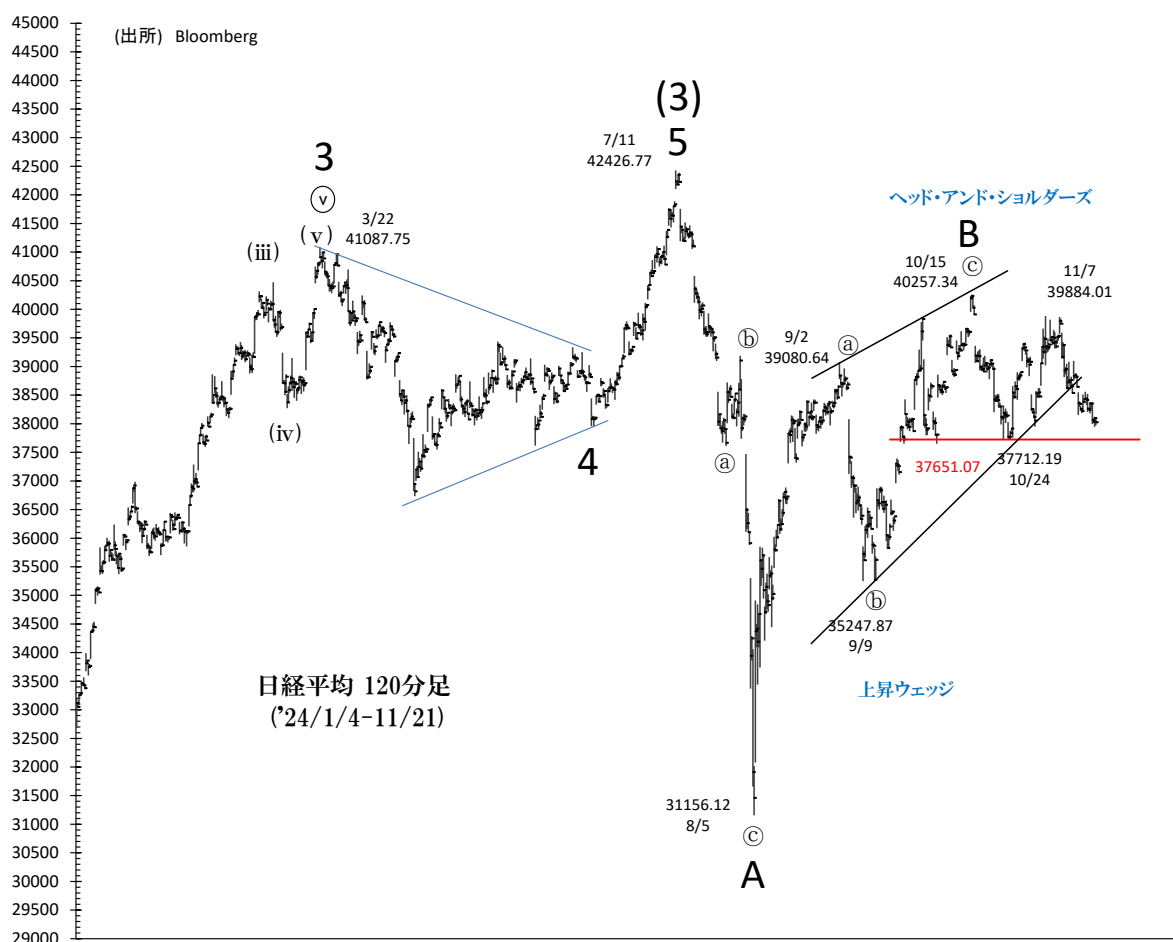
(※)トランプ次期大統領が打ち出す関税拡大が実施されれば—トランプ氏は日本製も含めた輸入品に 10~20%の一律関税をかけると主張しています—25 年以降、日本を含む世界の景気悪化が現実味を帯びてきます。それにより、第(5)波の上昇幅は短縮され、期間的にも長続きしない可能性があります。



【日足 エリオット波動分析】

31,156 円(8/5 安値)からのリバウンド[第(4)波中 B 波]は 40,257 円(10/15 高値)を以て終了した、とみられます。40,257 円(10/15 高値)を頂点とする[ヘッド・アンド・ショルダーズ]は、戻り高値を付けた可能性を示唆しています。

足元、日経平均は下値模索を再開したようです。年末から年明けにも 35,247 円(9/9 安値)を下回るでしょう。それは 8 月の「一番底」に次ぐ「二番底」になるでしょう。



【時間足 エリオット波動分析】

当面の日経平均の見通しは以下の二通りです。

[メインシナリオ] 35,247 円を下回り、「二番底」を形成

7 月高値以来の第(4)波は[トライアングル(A-B-C-D-E)]を形成中です。

31,156 円(8/5 安値)からの B 波((a)-(b)-(c))によるリバウンドは 40,257 円(10/15 高値)で終わり、そこからは C 波((a)-(b)-(c))による下げが進行中です。

39,884 円(11/7 高値)は、[ヘッド・アンド・ショルダーズ]の右肩トップとみられます。37,712 円(10/28 安値)を割れると弱気パターンからの下放れが始まり—11 月 21 日には一時 37,945 円と節目に迫りました—C 波による下落基調は鮮明になりそうです。最終的に C 波は 35,247 円(9/9 安値)を下回り、8 月安値に次ぐ「二番底」を付けるでしょう。

「二番底」の水準については、フィボナッチ比率から以下の水準に注目できます。

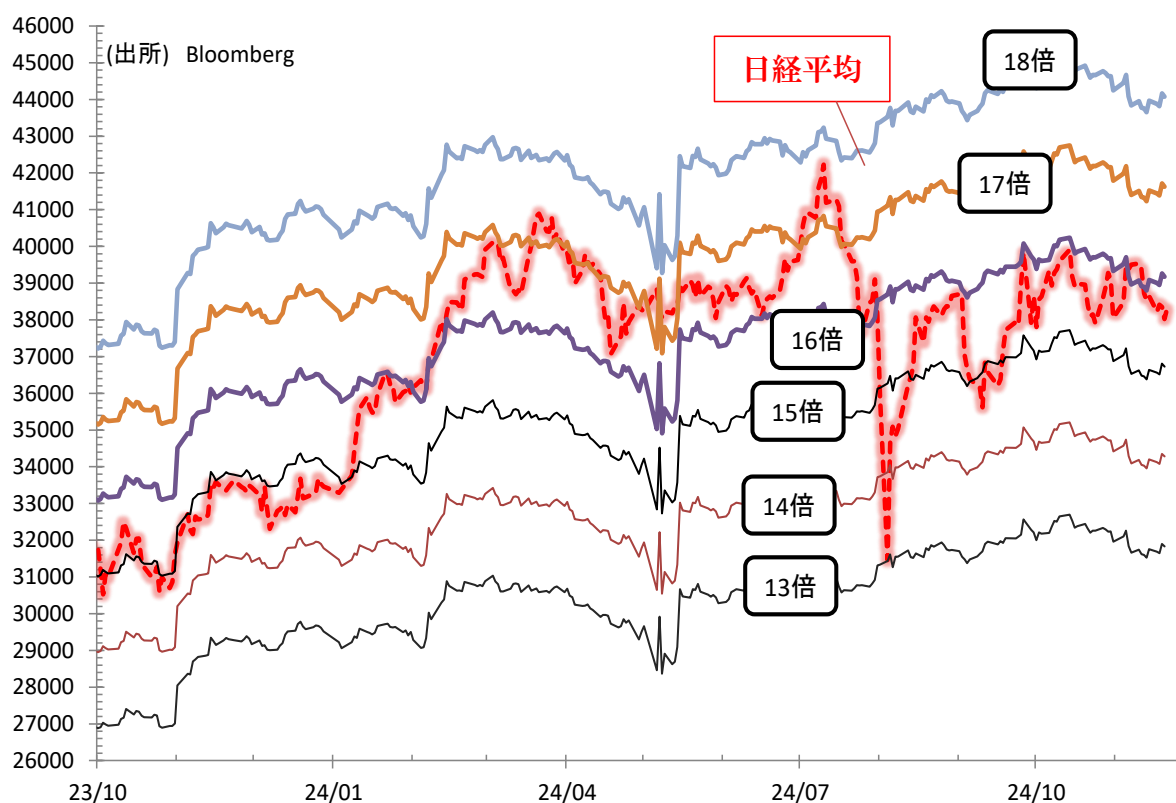
[34,632 円]…B 波の上昇に対し 61.8%押し水準

[33,304 円～33,103 円]…同 76.4%～78.6%押し水準

[サブシナリオ] 第(5)波は「エンディング・ダイアゴナル」

31,156 円(8/5 安値)からは第(5)波による上昇であり、そのパターンは波の重複が目立つ「エンディング・ダイアゴナル」です。40,257 円(10/15 高値)は(5)-1 波(三波構成)のトップ、そこから(5)-2 波の下げに当たります。この下げにより日経平均は[36,780 円-35,706 円](8 月からの上昇の 38.2%-50%押し)を打診し、その後は(5)-3 波による上昇となるでしょう。

[予想 PER 別の日経平均水準]



NY ダウ

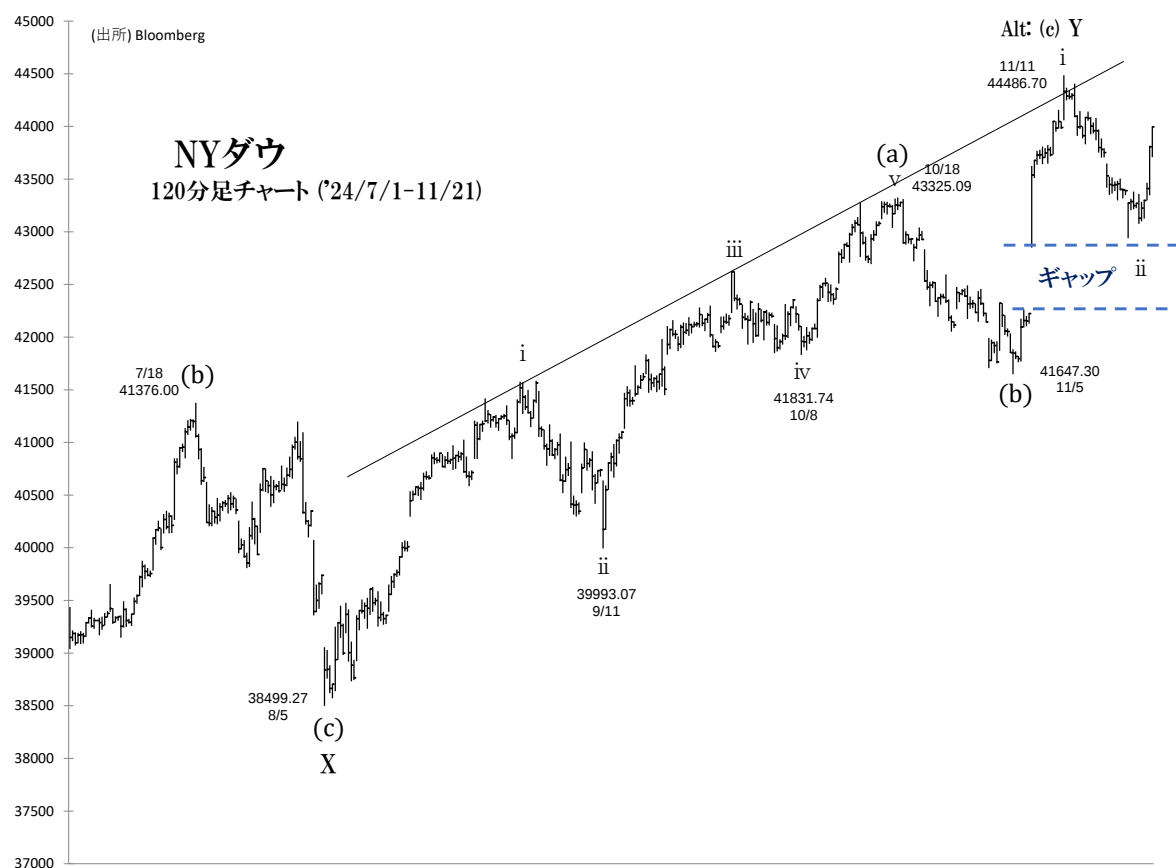


【日足 エリオット波動分析】

22 年 10 月安値(28,660ドル)以来の上昇(B)波は、[ダブル・ジグザグ(W-X-Y)]により展開しています。そのうち 38,499ドル(8/5 安値)を起点とする上昇は、Y 波(ジグザグ)に相当します。

長期的なチャネルラインをみると、[4 万 6000ドル]付近に重要なチャート節目が存在しています。実際にそこまで上がるかはわかりませんが、さらなる上昇がある場合の目安として注目です。

なおこの Y 波を終了すると、NY ダウは(C)波による下落に入っていくでしょう。(C)波は 22 年 10 月以降で一度もなかった、最大スケールの調整になるでしょう。



【時間足 エリオット波動分析】

38,499ドル(8/5 安値)から 43,325ドル(10/18 高値)までは(a)波による上昇、そこから 41,647ドル(11/5 安値)までの下げは(b)波。そして、足元は(c)波による上昇とみられます。

(c)波は(a)波と同じように五波構成(i 波～v 波)になるでしょう。

44,486ドル(11/11 高値)からの第 ii 波調整は、42,938ドル(11/19 安値)で終了した可能性があります。この見方が正しければ、NY ダウは年末に向けての「サンタクロース・ラリー」を迎え、第 iii 波は 44,486ドルを上抜くでしょう。

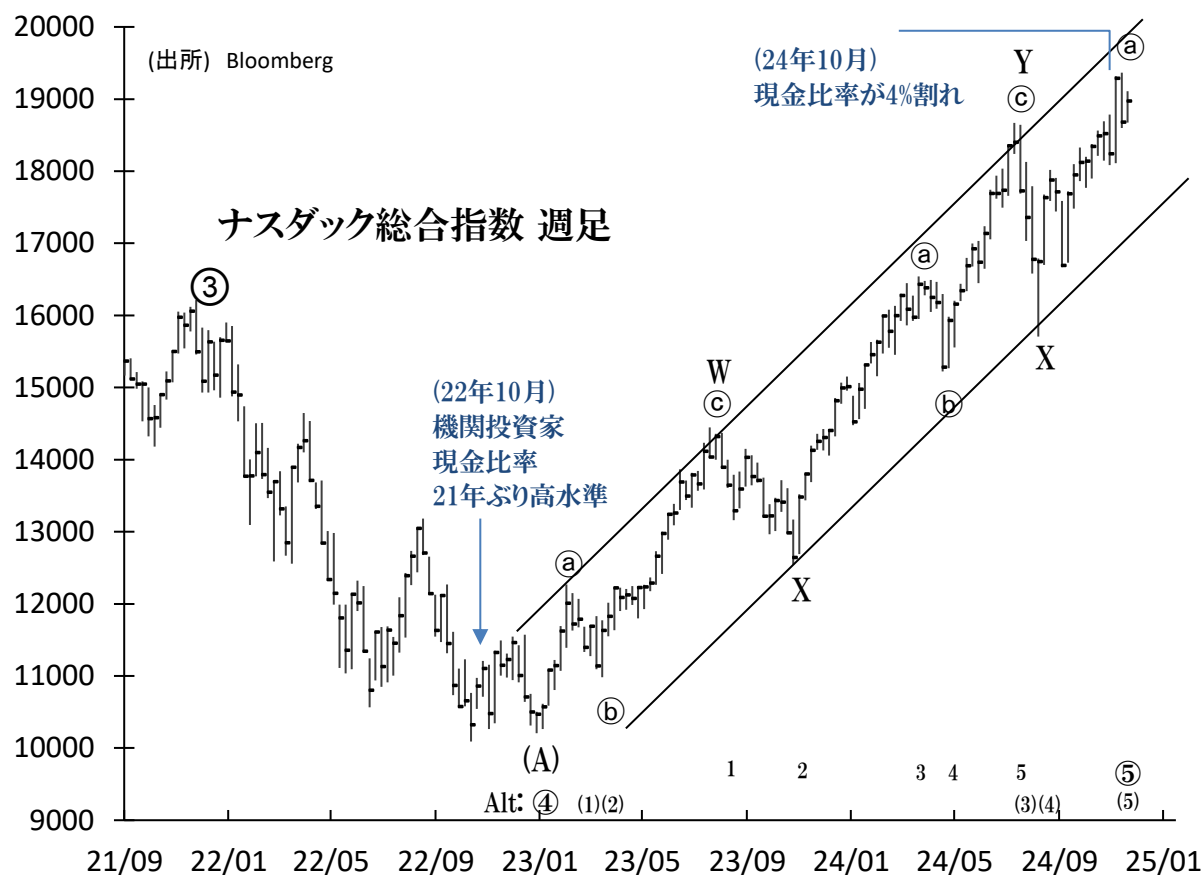
ちなみに、(c)波のチャート節目として以下に注目しています。

[45,244ドル]…22 年 1 月からの(A)波下落と、22 年 10 月からの(B)波上昇が、1:2 になる水準

一方、上記強気見通し継続のためには、米大統領選での結果を受けて生じた 11 月 5 日～6 日のギャップ(42,258ドル～42,850ドル)を埋めないことが条件です。

仮にギャップが埋められると「トランプ・トレード」終了が証左され、より大きな調整に—(C)波の調整に—備える必要があるでしょう。

ナスダック



【週足 エリオット波動分析】

22 年 12 月安値(10,207)以来、(B)波による上昇が進行中です。この(B)波は[トリプル・ジグザグ(W-X-Y-X-Z)]を形成し、25 年まで続くと思われます。

(プリファード(優先)カウント)

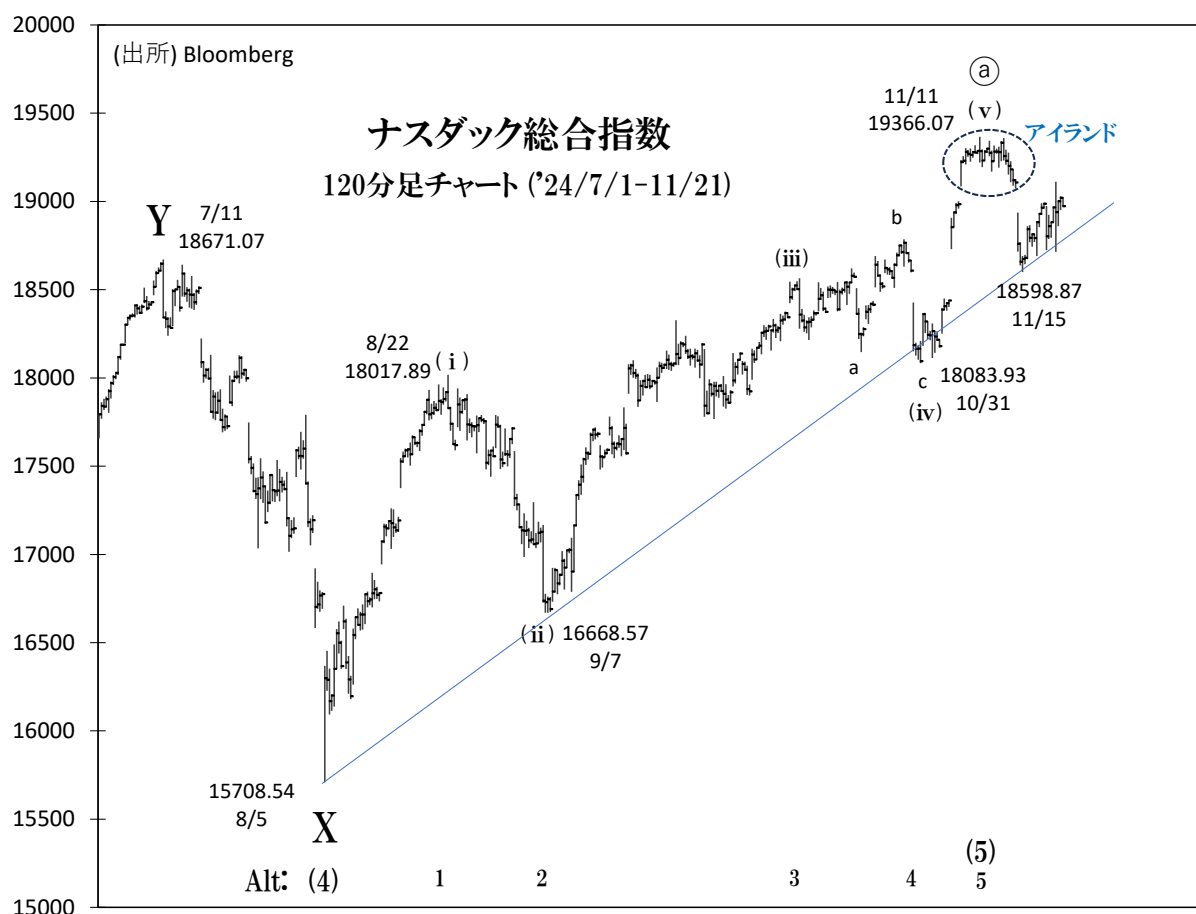
15,708(8/5 安値)から、三番目のジグザグ(①-②-③)が進行中です。今のところは②波の終盤とみられ、近いうちに③波の調整が起きるでしょう(既に③波入りかもしれません)。③波を完了すると④波の上昇に入りますが、それを以て 22 年 12 月を起点とする、(B)波による上昇はすべて完了します。

(オルタナティブ(代替)カウント)

22 年 12 月安値からの「五波動」による上昇第⑤波は終わったか、終わりつつあります。これによれば 25 年以降ナスダックは、優先カウントよりも深く、長い調整局面を迎えるでしょう。

機関投資家の現金比率が 4%割れ(売りシグナル)

米バンク・オブ・アメリカの 10 月の機関投資家調査によると、運用資産における現金比率は 3.9%と 21 年 2 月以来の低水準となりました。これは投資家が積極的にリスクを取っている表れですが、現金比率の大小は逆張り指標であり、経験則では現金比率 4%割れが「売りシグナル」とされます。ちなみに今回とは真逆のケース、例えば現金比率が 21 年ぶりの高さだった 22 年 10 月などは、買いの好機だったことがわかります。



【時間足 エリオット波動分析】

15,708(8/5 安値)からの④波による上昇は、19,366(11/11 高値)を以て終了したとみられます。そこからは⑤波による下げが始まったとみられます。

19,366(11/11 安値)からの戻りは鈍く、チョッピー(choppy)なパターンです。この点が、足元の NY ダウの上昇(インパルス的な急上昇)と大きく異なっています。ナスダックの⑤波における最初のリバウンドは終わったか、終わりつつあり、まもなく下落再開となるとみています。

⑤波の下値メドは 1 万 8000 処です。この付近には、④波のレサードイグリー第(iv)波安値[18,083]、8 月 22 日の高値[18,017]、8 月からの上昇の 38.2%押し水準[17,970]などが集中しています。

1 万 8000 処を明確に下抜くと、8 月からの上昇に対し 50%-61.8%押し[17,539-17,108]へ下振れしそうです。

なお 11 月高値からの下降波が五波構成(インパルス)となり、さらに 1 万 7000 処を下抜くようなら、より大きなスケールの調整が進行中とみるべきでしょう(週足分析でのオルタナティブ・カウントを参照)。この場合、8 月からの上昇第(5)波が 19,366 を以て終了し、当面 15,708(8/5 安値)を試す展開となりそうです。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

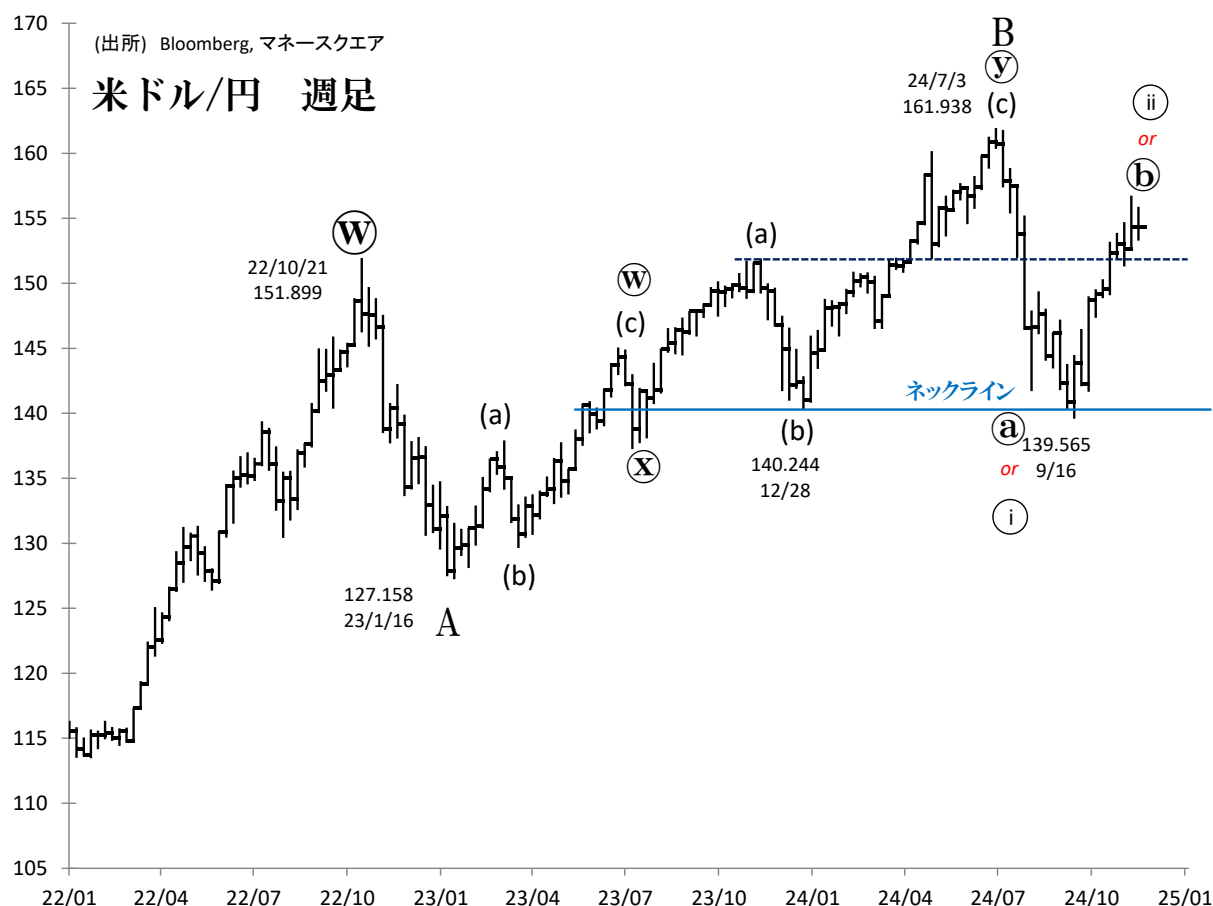
151.899 円(22/10/21)からは⊗波の「円高局面」が進行中です。この⊗波により米ドル/円(ドル/円)は、2028 年 4 月頃までレンジ相場を形成していくでしょう。161.938 円(7/3)は、15 年 6 月・125.860 円から 9 年目に付けた「8 年サイクル高値」とみられます。

22 年 10 月以来の⊗波が描くパターンとして大きくは、①[ランニング・トライアングル]、②[エクспанディッド・フラット]、これら二通りの可能性があります。なお①のもうひとつのパターンとして[ランニング・フラット]もあげられましょう。

①の場合、現行 C 波は A 波安値(127.158 円)を下回りません。C 波は三波で構成され、2011 年からの上昇チャネルのセンターライン(↑①)が強いサポートになるでしょう。

11 月中、①の水準は 135.145 円に位置します。

②の場合は、現行 C 波(五波構成)はチャネル下限(↑②)を目指すような、より大きなドル安・円高が見込まれます。11 月を通じ、②の水準は 115.520 円となっています。



【週足 エリオット波動分析】

161.938 円(7/3)からは、C 波によるドル安・円高です。C 波の長さは A 波と同等か、フィボナッチ比率関係を反映します。

[137.197 円]…A 波の長さ(24.741 円)=C 波の長さ

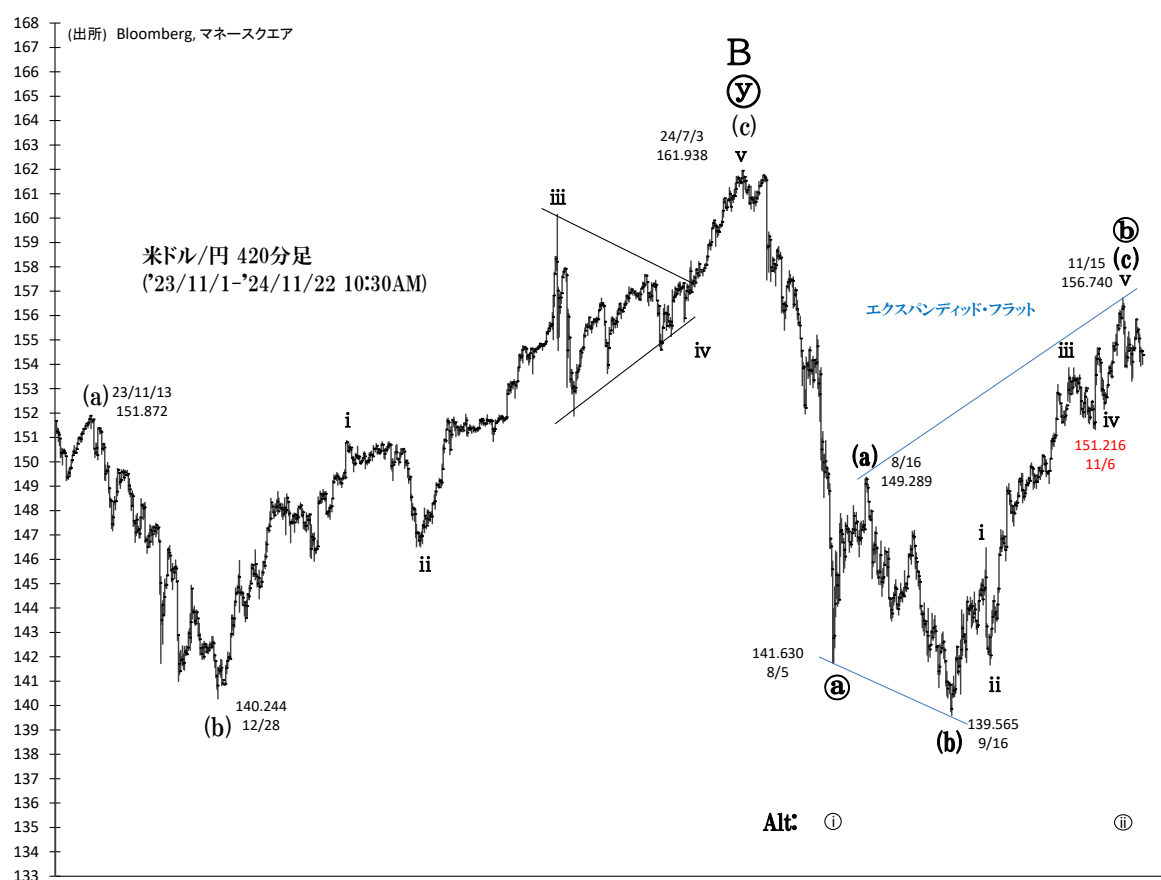
[131.358 円]…A 波の長さ×1.236=C 波の長さ(30.579 円) (※)この時点でドル/円は月足サポート①を明確に下回り、以下の水準を目指す可能性が高まります。

[127.745 円]…A 波の長さ×1.382=C 波の長さ(34.192 円)

[121.907 円]…A 波の長さ×1.618=C 波の長さ(40.030 円)

23 年後半からのパターンが、140 円処をネックラインとする『ヘッド・アンド・ショルダーズ(三尊天井)』だとすると、天井パターンにおける右肩トップ示現後、ドル/円は下落に転じるでしょう。さらにはネックライン割れをきっかけに、ドル安・円高の流れが強まると想定されます。

足元のドル/円上昇は、C 波中②波、あるいは C 波中マル ii 波に当たります。いずれのカウントを採用しても、近く始まるドル安円高(◎波 or マル iii 波)は、波 3 に相応しく、速く・大きなものになるでしょう。



【時間足 エリオット波動分析】

141.630 円(8/5)からは㉔波によるリバウンドであり、そのパターンは「エキスパンディッド・フラット」(a)-(b)-(c)とみられます。139.565 円(9/16)からは㉔-(c)波に相当します。

直近の 156.740 円(11/15)は、以下のチャート節目に近く、リバウンドは終わったか、終わりつつあります。

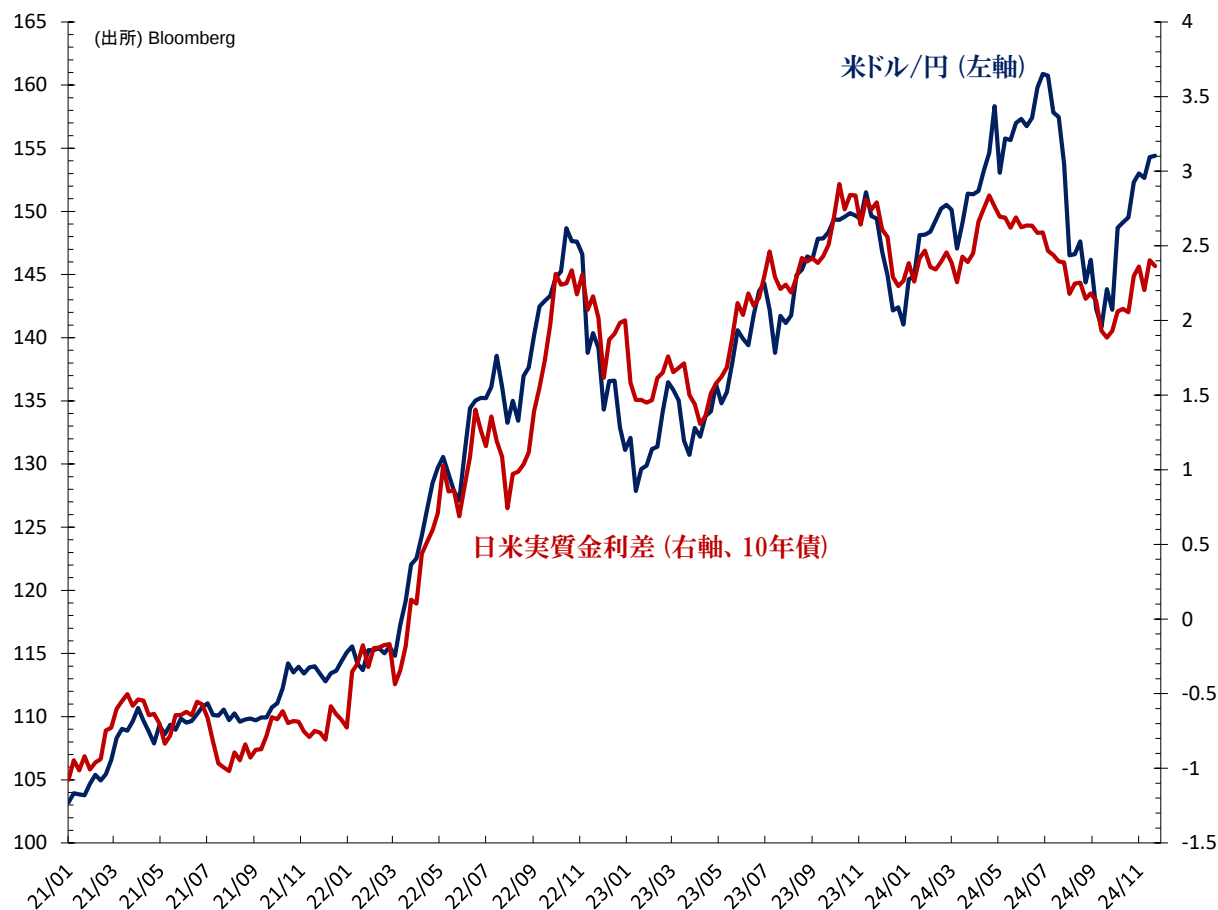
[156.657 円-157.150 円]…7 月から 9 月までのドル/円下落に対する 76.4%-78.6 戻り水準

[157.145 円-157.592 円]…7 月から 8 月までのドル/円下落・㉔波に対する 76.4%-78.6%戻り水準

今後 151.216 円(11/6)を下抜くと、ドル/円が下落基調へ転換した、最初のシグナルが点灯します。

金利差からのドル/円推計値

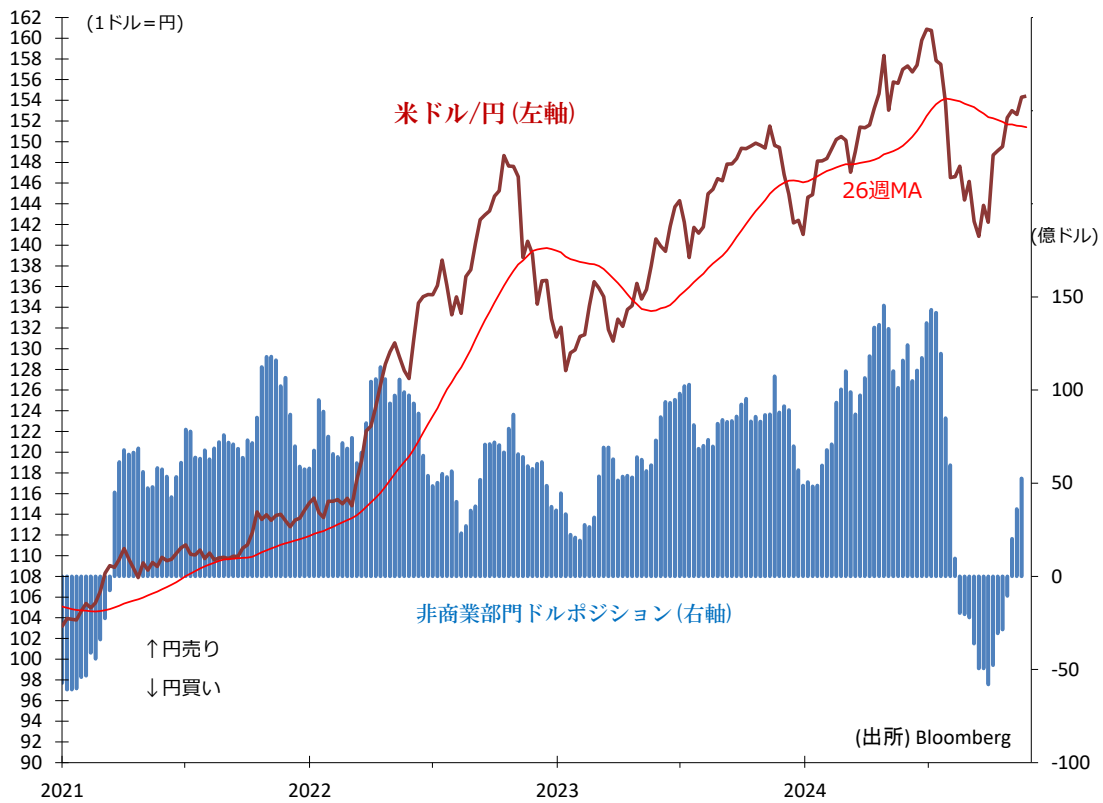
日米実質金利差からのドル/円推計値は[147.38 円]。この推計値に比べ、ドル/円の水準はかい離しています。このような状況は長く続かず、近いうちにかい離は縮小に向かうと思われます。



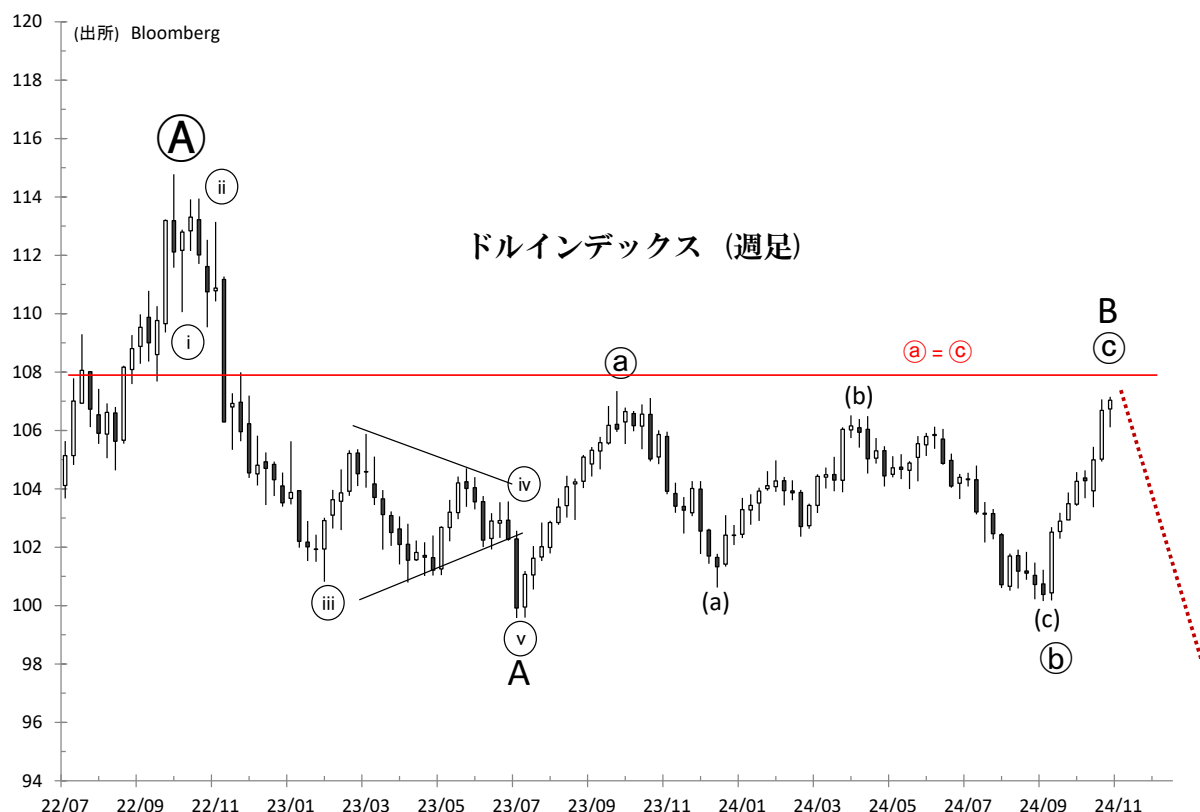
投機筋の円売りは拡大(11 月 12 日時点)

IMM 通貨先物市場では、投機筋(非商業部門)による円売り持ちは、前週の 36.4 億ドルから 52.5 億ドルへ拡大しています(円売りポジションは 3 カ月半ぶりの大きさ)。

投機筋にとってのドル/円売買基準である、26 週 MA(151.400 円)を維持する限りは円売り持ちは継続すると思われます。一方、26 週 MA が破られてからは、円買い基調が強まるでしょう。



ドルインデックス (ドル指数)



【週足 エリオット波動分析】

22 年 9 月高値(114.778)以来、ドルインデックス(ドル指数)は⑤波(A-B-C)による下落局面にあります。

23 年 7 月安値(99.578)からは B 波によるリバウンドであり、それは「フラット」(a-b-c)を形成中とみられます。9 月安値(100.157)以来のドル高は B-③波に当たります。

11 月 21 日、ドル指数は 1 年ぶり高値を更新、一時 107.156 と 23 年 10 月高値(107.348)に迫りました。一時的に 23 年 10 月高値を上回る可能性があり、その際は[107.927](④波と③波が等しく上がる N 計算値)を試すでしょう。

もっともドル高は最終局面にあり、23 年高値を上抜くことがあっても、「ダマシ」シグナルとなりましょう。

基本観はドル安です。足元のドル高終了後に始まる C 波によるドル安は、25 年には 23 年安値を大きく下回るでしょう。

⑤波は最終的に、[90.930]、[89.209]を試す可能性があります。前者は A 波と C 波が等しく下がる水準、後者は 21 年 1 月に付けた、④波のレサラー・ディグリー(4)波安値です。

※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもあります。お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・取引所株価指数証拠金取引における委託手数料は注文が成立した日の取引終了後の値洗い処理終了時に証拠金預託額より、新規および決済取引のそれぞれに徴収いたします。手数料額は、通常 1 枚あたり片道 303 円(税込)、NY ダウリセット付証拠金取引および NASDAQ100 リセット付証拠金取引は 1 枚あたり片道 33 円(税込)です(ただし、建玉整理における委託手数料は無料です)。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。取引所株価指数証拠金取引に必要な証拠金額は、商品ごとに当社が定める 1 枚あたりの必要証拠金の額に建玉数量を乗じる一律方式により計算されますが、1 枚あたりの必要証拠金額は変動いたします。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
